

第十六話 悩ましきコレクター魂（下）

●乱歩ファンはすごい

なぜ人はものを集めたがるか。そんなことを考えてみた前回だが、この一カ月のあいだに、あるできごとがあった。

前回、同じ新潮文庫で、中身は同じだが、カバーがデザイン違いの『江戸川乱歩傑作集』を三冊買ったという話をした。近著『古本道入門』（中公新書ラクレ）にそのことを書いたら、知人からハガキで指摘を受けた。ほかにも二点、別カバーがありますよとその存在を知らせてくれたのだ。

また、別のところでも、新潮文庫版『江戸川乱歩傑作集』について、本で紹介した三点のほかに別カバーがあることを岡崎は知らないらしい、と言っている人がいると人づてに聞いた。私は、これぞ「コレクター魂」だなあ、と感心した。

よく読んでもらえばわかるが、私は拙著のなかで、『江戸川乱歩傑作集』カバーは、紹介した三点ですべて、と言い切っているわけではない。たまたま、新古書店のチェーン店で、同じ本が三冊並んでいて、それがすべて別のカバーだったので、中身はまったく同じながら三冊とも買った、という話をしただけだ。

しかし、乱歩ファンというのはすごいもので、たちまち、二方向から指摘を受けた。間違いを書いたわけではない。しかし、知っている以上、それを黙ってられない。教えてくれたお二人は、おそらく、カバーの違う『江戸川乱歩傑作集』を少なくとも五冊を、所持しているのではないか。

世は「電子書籍」到来にあわてふためき、随時、紙の本はデジタル化していこうという趨勢のなか、読むには同じテキストを五冊も六冊も持つというのは、時代に逆行している。いや、テキストは一本化し、別カバーだけ画像として保存すれば、いつでも好きなときに、好きなデザインで読めるわけで、ひょっとしたら「電子書籍」は、コレクター向けなのかもしれない。

ただ、ここからは想像だが、コレクターという者は、情報だけ集めればよいとは思わなくて、やっぱり現物がちゃんと本棚に並んでいないと安心できないのではないか。同じタイトルの本で、バージョン違いが複数冊、本棚にある。その光景を見て満足する。これぞ、コレクター心理だろう。そこから一つの分野の研究が進む源泉にもなっている。

●集めることでわかってくること

長山靖生『おたくの本懐 「集める」 ことの叡智と冒険』（ちくま文庫）は、「モノを集めることの意味、有効性、社会的価値」を、多くの実例を引いて証明した本だ。

元本（一九九二年刊）も所持しているが、単行本のタイトルは『コレクターシップ・「集

める」ことの叡智と冒険』だった。十三年を経て、「コレクターシップ」が「おたくの本懐」と改められた。文庫化に際して、冒頭に「その頃、なぜ私はおたくを弁護しなければならなかったか」という一文が新たに書き下ろされているのは、改題にあたって、「おたく」の擁護を表明する必要があったからである。

ここで、絵画や骨董、茶道具までを蒐集対象とする錚々たる近現代のコレクターたちを紹介し、彼らを「元祖おたく」と既定しているのも、改題に引っ張られているからで、本書の目ざすところは、やはり元のタイトルにある「コレクターシップ」というべきものではないか。

ここで著者は「集めていくうちに、集まったものから自分の考えを教えられ、考えをまとめていく方向性を示されるということが、しばしばあるのではないだろうか。自分でも目的が分からない単なる好奇心から、人はものを集めはじめる。だが、いつしか集まったモノは言葉となり文脈となって、人を叡智へと導いていく。自分でもはっきり分からなかった好奇心の正体が、叡智へと結晶化していく」と、コレクターの言い訳とも思える、強い衝動を正当化、代弁している。

「こんなガラクタばかり集めて、家中が散らかって汚くなるし、もうどうにかしてちょうだい！」と、奥さんから日ごろ責め続けられているコレクター諸氏は、この文面を暗記し、ただちに反撃の材料としていただきたい。

●長山靖生氏はいかにしてコレクターになったか

著者自身が古書のコレクターであり、それを基盤に、歯科医という正業のかたわら執筆活動を怠りなく、ほとんど毎月のように（はげさか？）著書を世に送り続けている。『偽史冒険世界』『鷗外のオカルト、漱石の科学』『日露戦争もうひとつの「物語」』などのタイトルからわかるとおり、専門は日本近代史、とくに科学史に強く、漱石に関する著書も多い。また、『海野十三全集』の編纂に関わるなど、日本のSF・ミステリの蒐集家でもある。

かねがね、長山氏の本棚を一度見せてもらいたいと思っているが、それはおそらく、長山記念館として、将来保存すべき筋の通ったコレクションになっているはずだ。

元本の『コレクターシップ』が、刊行から十二年を経て、『おたくの本棚』というタイトルに変えて「ちくま文庫」入りした際、書き加えられた補章に、著者の「コレクターシップ」が披瀝されている。くわしくは本書を読んでいただくとして（ちなみに元本も「ちくま文庫」版も品切れ中）、要点だけを追う。

長山氏の蒐集対象は「戦前の探偵小説や科学小説、偽史やとんでもない科学上の奇説珍説にかんする本、明治文学、明治大正期の社会風俗が分かるような雑誌類など」。現在は生まれ故郷の地方都市で自営の歯科医をしている。大学は横浜市鶴見区の鶴見大学へ通い、「学生時代には食費を削って本を買い、今日に至るまで本以外に道楽をしたことはないが、まったく後悔はしていない」と言うから、自分の大学生活を考えて、同類がここにもいた

とニンマリする。

ただし、ここが違うと思うのは、氏は、歯科医を務めながら、コレクターシップを維持し、多数の著作を執筆するために「早寝早起きを励行している」。そこには「快樂を追求するためには、身を慎んで規則正しい生活をおくらなければいけない」という真理の会得がある。おもしろい。たしかに、長山氏の著作群を眺めると、規則正しい生活のなかからでなければ生まれない緻密な仕事ぶりだ。

実生活とコレクターシップを併存させるためには「規則正しい生活」が必須、とは教えられた。私も夜になって、だらだらと酒を飲むのを止めれば、もう少しマシな仕事ができるかもしれないと思うことがあるのだ。反省しよう。